

発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価に関する研究 ーF & T感情識別検査拡大版の開発と試行に基づく検討ー

(調査研究報告書 No.119) サマリー

【キーワード】

発達障害 コミュニケーション 検査

【活用のポイント】

職場では、明確に感情が表現された音声や表情だけでなく、より複雑で曖昧な感情が表現された音声や表情から感情を読みとらなければならない場面がある。本研究では、曖昧な音声や表情から相手の快-不快感の強さを判断する際の特徴を評価するためのF&T感情識別検査拡大版を開発した。本報告書は、発達障害者のコミュニケーションの特徴を評価する際の視点や支援の課題を明確化するための資料としての活用が期待できる。

2014年4月

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

1 執筆担当（執筆順）

望月 葉子（障害者職業総合センター障害者支援部門 特別研究員）

武澤 友広（障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員）

向後 礼子（近畿大学教職教育部 准教授）

2 研究期間

平成24年度～平成25年度

3 報告書の構成

序章 発達障害者のコミュニケーション支援に関する検討課題

第Ⅰ部 F&T感情識別検査拡大版の開発

第1章 F&T感情識別検査拡大版の開発

第2章 F&T感情識別検査拡大版の検査特性に関する検討

第Ⅱ部 発達障害者の感情認知特性 ……F&T感情識別検査に基づく検討……

第1章 発達障害者の感情語に関する理解、感情の経験頻度並びに表情識別の概要

第2章 F&T感情識別検査4感情版の結果からみた発達障害者の特性

第3章 F&T感情識別検査拡大版の結果からみた発達障害者の特性

第Ⅲ部 発達障害者のコミュニケーション・スキルに関する課題と支援

第1章 対人関係のストレスに関する検討

第2章 事例からみた発達障害者支援の課題 ……ヒアリング調査の結果から……

総括

資料

4 調査研究の背景と目的

発達障害者は、音声や表情から相手の感情を判断することに課題があることが指摘されているため、「表情（Face）と音声（Tone）とではどちらがより正確に感情を判断できるか」といったコミュニケーションにかかわる特性評価は支援・指導において有益な情報となる。コミュニケーション・スキルを評価する方法の1つに、障害者職業総合センターで開発を行ったF&T感情識別検査4感情版がある。この検査は、基本感情（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪）が明確に表現された音声や表情からの感情の読み取りの特徴を評価するものである。しかし、職場においては、感情が曖昧に表現されることも少なくないため、曖昧な感情表現についての読み取りの特徴を評価できる検査も必要である。

本研究では、曖昧な感情が表現された音声や表情から感情を判断する際の特徴を評価する検査として「F&T感情識別検査拡大版」を開発した。そして、F&T感情識別検査4感情版と拡大版により発達障害者のコミュニケーション・スキルの特徴を評価すると共に、質問紙調査やヒアリング調査から得た情報も参考にして、コミュニケーション支援の課題を検討した。

5 調査研究の方法

- (1) F&T感情識別検査拡大版の開発のための調査
- (2) F&T感情識別検査拡大版の基準値の作成のための調査
- (3) F&T感情識別検査による発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価の試行
- (4) ヒアリング調査による発達障害者のコミュニケーション支援の課題の検討

6 調査研究の内容

(1) 調査の方法と内容

イ F&T感情識別検査拡大版の開発のための調査

調査対象：23歳－61歳の定型発達の成人10名（男性4名／女性6名）

調査時期：平成24年6月

調査内容：F&T感情識別検査4感情版を作成した際の原刺激224（8（台詞の種類）×7（感情の種類：喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐怖、軽蔑）×4（演者の種類：20歳代、40歳代の男女各2名））を図1のように条件別に呈示し（「音声のみを呈示」「表情のみを呈示」「音声と表情の両方を呈示」）、刺激が表現している感情（複数回答可）を回答させた上で、その回答に対する自信を3段階で評定させた。



図1 刺激の呈示条件

ロ F&T感情識別検査拡大版の開発

上記イの調査結果に基づき、特定の感情を読みとりにくい音声刺激及び表情刺激（曖昧刺激）を選定し、拡大版を構成した。なお、曖昧刺激には不快感情を読みとられる傾向が認められたことから、不快刺激を繰り返し視聴することによるストレスを緩和するため、「喜び」を表現した快刺激を検査刺激に加えた。また、快刺激が呈示された直後には、ストレス緩和による影響が想定されたため、分析対象外の曖昧刺激を配置した。拡大版の検査刺激の構成は以下の通りである。

〔刺激の構成〕

9（曖昧刺激）×2（反復呈示）+3（快刺激）+2（分析対象外の曖昧刺激）=23刺激

〔刺激の呈示条件〕

検査は刺激の呈示方法により以下の3つの条件（呈示条件）に分かれる。

各条件は下記の①から③の順序で実施する。所要時間は各条件約7分で、検査全体で約21分である。

①「音声のみ」条件：言葉の意味からは感情を読みとれない台詞（「こんにちは」など）を感情を込めて話している音声が表示される。

②「表情のみ」条件：感情を込めて台詞を話している表情が表示されるが、音声は表示されない。

③「音声+表情」条件：感情を込めて台詞を話している表情と音声と同時に表示される。

[回答方法]

呈示された刺激が表現している快-不快の程度を「-4：非常に不快である」-「0：快でも不快でもない」-「+4：非常に快である」の9段階で回答させ、それをその刺激の評定値（-4点～+4点）とした。

ハ F&T感情識別検査拡大版の基準値の作成

調査対象：18歳-29歳の大学生又は大学院生155名（男性83名／女性72名）

調査時期：平成24年10月～平成25年2月

調査内容：拡大版の刺激を呈示し、刺激から読みとることができる快-不快感の強さを9段階で評定させた。

この他、質問紙調査によって、以下のデータを収集した。

感情語（喜び、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐怖、軽蔑）に対応する快-不快の強さ／調査時点における直近3ヶ月間の感情の経験頻度／感情が喚起される場面と感情語の対応関係／表情写真と感情語の対応関係とその判断の際の注目箇所／対人関係におけるストレス

ニ F&T感情識別検査による発達障害者のコミュニケーション・スキルの特性評価の試行

調査対象：18歳-54歳の発達障害の診断・判断を有する103名（男性81名／女性22名）

調査時期：平成25年4月～平成25年12月

調査内容：上記ハと同じ調査内容に加えて、F&T感情識別検査4感情版を実施した。4感情版は拡大版と同様の呈示条件において、音声や表情が表している感情を「喜び」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の中から選択させる検査であり、正答率、感情間の混同の傾向及びコミュニケーション・タイプを把握することができる。

ホ ヒアリング調査による発達障害者のコミュニケーション支援の課題の検討

調査対象：上記ニの協力者のうち、ヒアリング調査に協力の得られた者。20、30歳代の発達障害の診断・判断を有し、職業経歴を有する7名（男性4名／女性3名）

調査時期：平成25年5月～平成25年12月

調査内容：職歴や生活経験、コミュニケーションの課題など

(2) 調査結果から得られた知見

イ F & T感情識別検査拡大版の基準値（暫定版）について

18歳－29歳の149名（男：78名／女：71名）のF&T感情識別検査拡大版の結果に基づき、基準値を性別、呈示条件別に作成した。なお、本研究の定型発達の対象者は大学生・大学院生であったが、発達障害のある対象者の範囲は20歳代から50歳代に及んでいた。分析の結果、年代により回答傾向が異なっていたため、今回作成したF&T感情識別検査拡大版の基準値は限られた年代層に対応する暫定版とした。

基準値は「曖昧な感情表現に対して、どの程度、快あるいは不快に偏って感情を読みとるか」を判断するための基準となる。拡大版の検査結果から、「他者から必要以上に否定的な感情を読みとっていないか」といった対人態度に関する特性を評価することができる。

ロ F & T感情識別検査結果から評価できる発達障害者の特徴について

発達障害の診断・判断を有する者¹の調査結果を定型発達者や知的障害者の調査結果と比較することで、以下の特徴が明らかになった。

(イ) F & T感情識別検査 4 感情版における検討

- ① 全ての呈示条件について、発達障害の方が定型発達者よりも正答率が低く、感情の読み取りに困難があることが示唆された。また、発達障害者においては、「表情のみ」条件の正答率が最も低かった。

4 感情版の正答率（標準偏差）

定型発達者：「表情のみ」	=	「音声のみ」	<	「音声＋表情」
84.5% (6.69)		85.9% (6.90)		94.7% (5.55)
発達障害者：「表情のみ」	<	「音声のみ」	<	「音声＋表情」
71.0% (10.18)		76.8% (9.57)		86.9% (10.04)

- ② 表1に示すように、「音声のみ」条件について、発達障害者は定型発達者よりも「喜び」を「怒り」や「嫌悪」に読み誤る傾向が強いことから、対人関係におけるトラブルの原因として快感情の表現から不快感情を読み誤ったり、不快感情の表現から快感情を読み誤る傾向がないか、留意すべきである。

表1 4 感情版の「喜び」と「怒り」「嫌悪」の混同率

呈示条件	対象者	快感情の表現から不快感情を読む誤り			不快感情の表現から快感情を読む誤り		
		喜び→怒り	喜び→嫌悪	計	怒り→喜び	嫌悪→喜び	計
音声のみ	定型発達者	0.3 %	0.6 %	0.9 %	0.8 %	0.6 %	1.4 %
	発達障害者	1.0 %	6.9 %	7.9 %	2.2 %	3.5 %	5.7 %
表情のみ	定型発達者	—	—	—	0.1 %	—	0.1 %
	発達障害者	0.2 %	1.1 %	1.3 %	0.2 %	0.1 %	0.3 %
音声＋表情	定型発達者	0.3 %	0.4 %	0.7 %	0.2 %	0.2 %	0.4 %
	発達障害者	0.1 %	1.7 %	1.8 %	0.2 %	0.2 %	0.4 %

1 本研究における発達障害者の8割が「自閉症スペクトラム」の診断を有しており、単独診断においても重複診断においても、「自閉症スペクトラム」の診断がない者は全体の1割程度であった。

③ 発達障害者は定型発達者よりも「悲しみ」を「怒り」や「嫌悪」に読み誤る傾向が強いことから、対人関係におけるトラブルやストレスの原因として「他者の感情を必要以上に不快に解釈していないか」に留意すべきである。また、このような傾向は知的障害を伴う者を含む発達障害者の特徴であった。

④ 回答傾向から判定されたコミュニケーションタイプを知的障害者の結果と比較したところ、(i) 高受信タイプ、相補タイプが多く、低受信タイプが少ないこと²、(ii) より識別力の高い情報を優先的に利用するタイプの発達障害者では「音声」に依存する傾向が強いことが示唆された。

(ロ) F & T感情識別検査拡大版における検討

① 図2に示すように「音声のみ」「音声+表情」条件について、発達障害者の方が定型発達者よりも不快な評定を行っていたことから、他者の曖昧な感情表現に対して必要以上に不快な感情を読みとる傾向に留意する必要がある。

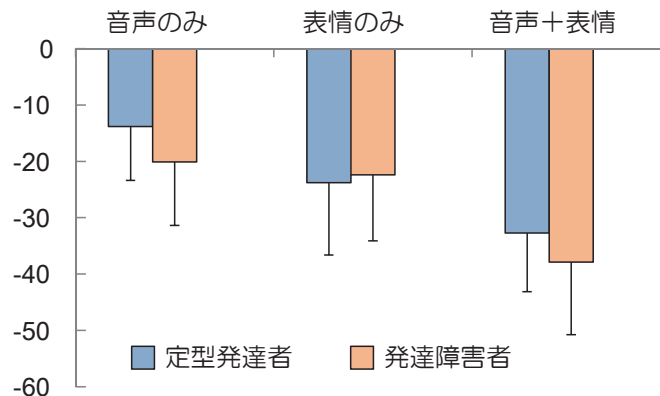


図2 拡大版の曖昧刺激に対する評定値の合計点の対象者間平均（誤差棒は標準偏差）

② 発達障害者については、直近3ヶ月間において「怒り」「嫌悪」「恐怖」を多く経験しているほど、曖昧な感情表現に対して不快な感情を読みとりやすいことが示唆されたが、定型発達者においてはそのような関連性は認められなかった。この結果から、検査結果のフィードバックに際しては日頃の感情経験に留意すべきである。

(ハ) 感情語に関する知識・感情の経験頻度・表情の注目箇所・対人関係でのストレスの検討

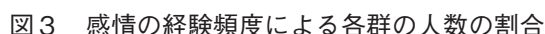
① 表2に示すように、感情語（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・軽蔑）に関して、快－不快度を評定させたところ（－4点～＋4点）、定型発達者と発達障害者の回答傾向に大きな違いは認められなかった。具体的には「喜び」が最も快であり、「怒り」「嫌悪」が最も不快である点では共通していた。一方、不快感情（悲しみ・恐怖・軽蔑）の不快度に基づく並び順は異なっていた。

2 高受信タイプ：全ての呈示条件について正答率が一般基準の9割以上
相補タイプ：「音声のみ」「表情のみ」単独では正答率が低い「音声+表情」の正答率が高い
低受信タイプ：全ての呈示条件について正答率が一般基準の7割以下

〈定型発達者（大学生・大学院生）〉

〈発達障害者〉

② 図3に示すように、感情の経験頻度については、「恐怖」の経験頻度は発達障害者の方が多かったが、それ以外の感情（喜び・悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・軽蔑）については定型発達者の方が多かった。ただし、この結果から「発達障害者は日常生活において快の状況を経験することは少ないが、一方で不快の状況を経験することも少ない」と結論するには慎重さを要する。直近3ヶ月の経験に限定した経験であり、調査時点以前の在学中・求職活動中・在職中・その他における経験は回答に反映されていないからである。



- 23 –

まうことによるストレス」については、発達障害者の方が定型発達者よりも強いことが示唆された。ただし、これらのストレスを強く感じるかどうかは、本人が自身のコミュニケーションの困難や特徴をどのように捉えているかに影響される可能性がある。

ハ ヒアリング調査による発達障害者のコミュニケーション支援の課題の検討

(イ) 事例検討から示唆されたこと

F&T感情識別検査の結果は、コミュニケーションにおける特徴に当事者や支援者が気づいている場合だけでなく、気づいていない場合においても、支援の課題を特定するうえで、重要な知見を提供するものである。また、こうした結果を解釈するうえで、職場適応の状況や対人ストレスの特徴を併せて検討することが必要である。

- ① 発達障害者は一般基準に比べ、特に表情からの感情識別の正確性が低い。こうした特徴に対しては、表情識別訓練の可能性が示唆された。しかし、表情を見ることに対する抵抗感が強い場合など、訓練が最善の提案ではない場合もある。
- ② 職場における不適応等の経験があっても、自身の感情の読み取りの特徴に気づいていたり、関心を持っている事例は少なかった。ただし、職場不適応等の経験は障害特性への気づきと関連しており、就業可能な業務や対人トラブルの現状が検討されていた。こうした検討には、相談支援の役割が大きい。
- ③ 相談支援等の利用に至らない事例もあり、支援体制整備や支援機関間の情報共有の必要性が示唆された。発達障害の特性理解や対処方法の確認・メンタルヘルス支援など、相談支援を進めるうえで、キャリアカウンセリングにおける支援との連携や、必要に応じて職業リハビリテーションの専門支援との連携を構想することも検討事項となる。
- ④ 雇用関係を選択しなかった事例の背景を分析することで、雇用関係への参入に際して配慮すべき要件が浮かび上がった。具体的には、作業遂行における知識や技能の特徴を明らかにすることに加え、時間配分については個々のペースを確認する、即時・対面の顧客対応ではない場面や手段を介することで就業可能な仕事を創出する、苦手な業務については役割分担や固定で対応する、コミュニケーションの課題については言語によるコミュニケーションのみならず、非言語コミュニケーションの特徴に基づく支援を検討する、といった点である。こうした検討は、雇用における適応可能性を高めるための支援の課題といえる。

(ロ) F&T感情識別検査の検査結果の解釈における留意事項

コミュニケーション・スキルに関する発達障害者支援の課題を明らかにするうえでは、F&T感情識別検査の結果を効果的に活用することが期待される。そのためには、①「怒り」と「嫌悪」の混同が起きる状況と対応の考え方、② 検査結果を踏まえた過去の経験の振り返り、③ 補完行動の提案と環境調整や支援の考え方、④ 表情識別訓練の実施可能性と課題、⑤ 感情語の理解や経験等（対人ストレスの評価を含む）の確認、⑥ 特性への配慮、といった検討が必要である。